



キラリ山形 元気な会員企業

（株）原田製作所

設立1967（昭和42）年5月。
原田好輔代表取締役社長。船舶用油ろ過機、ケミカルポンプ機構部、自動車部品、開閉機部品などを主力に素材調達、製品加工、組立調整、検査機能を業務内容とする。〒990-2251 山形市立谷川1丁目1059-17。☎023・686・4641

県製造業発展の基礎を築いた。

山形伝統の鋳物製造技術が船の世界に。約半世紀近くにわたって船舶用油ろ過機の製造に取り組んでいるものづくり企業がある。常に誠心をもって、常に考え、常に協力して我々は進む」を経営理念とする（株）原田製作所。社会にとって欠くことのない、存在価値の高い企業を目指す会員企業を紹介する。

同社のルーツは戦前、現社長原田好輔氏の父忠三郎氏が、東京・蒲田の町工場へ見習い修業に入り、やがて現地で独立し鋳物部品製造業を興したことに始まる。忠三郎氏の長兄は、ハッピー工業（現・ハッピージャパン）の創始者原田好太郎氏。同氏は1923（大正12）年に山形市宮町で鋳物用砂型の原型となる木型屋を興し、1927（昭和2）年に鋳物業に進出、ミシン部品の製造を手掛ける。戦後は自社ブランド「ハッピーミシン」を誕生させるなど、本

町工場のメッカで腕を磨く

そうした兄の影響を大いに受けたのだろう。しかも修業先は町工場のメッカ「大田区蒲田」。現在においても優れた技術力と対応力で日本の製造業を支えている。忠三郎氏はさまざまな鋳物部品を手掛ける中で採まれ腕を磨いた。「品質にこだわる。ユーザーに喜ばれるものづくりを心掛ける。納期は必ず守る」という今日の同社の基本方針は、そこから生まれ

横浜のメーカーから打診
大きな転機が訪れたのは昭和43年10月。同社の主力商品となる船舶用の油ろ過機本体の製造を開始した。船舶のエンジン等がスムーズに稼働するには、使用される重油、潤滑油の不純物を取り除かなければならない。横浜市のフィルター・メーカー神奈川機器工業（株）が「船が沈んでも

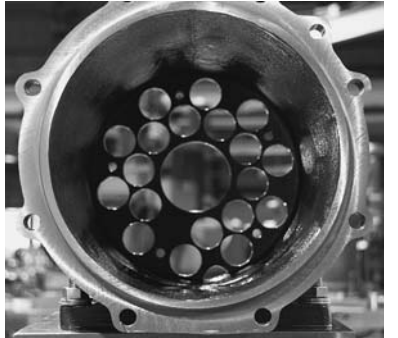
綿々と伝わる。
戦後は川崎市に新たに工場（株）原田（株）を設立、鋳物部品を製造していたが、都市化が急激に進出し、工場周辺にアパートや病院が建設されたことから工場を引き揚げた。昭和36年、山形市風間において、「山形鋳物研究所」を立ち上げて、鋳物砂の研究開発及び処理業に着手し関連工場に鋳物砂を供給。さらに、社名を「（株）原田製作所」に変更、鋳物の空洞部をつくるための型・中子（なかご）製造を行っていた。

作動している油ろ過機」を実現するため、特殊加工したフィルターを収める本体を求めていた。
各地の鋳物製造業者を探したが、なかなか見つからない。そんなとき、川崎時代に優れた鋳物部品を製造していた会社が山形で工場を再開していることを知り製造を打診。工夫を重ねた結果、要求に応える本体を提供することができた。社名を現在の（株）原田製作所と改称し以来、「素材加工―組立―検査」まで一貫生産している。

船舶用油ろ過機本体の製造で社業の基礎を築き、さらに、化学工業、製紙、食品製造の過程等で使用する薬品の注入を調節する定量ポンプの機構部製造や、トラックのシャフトをつなぐカップリングといった自動車部品などを主に手掛ける。

この間、立谷川の山形機械工業団地に移転し、五軸制御マシンニングセンター、多面バレットマシンニングセンター、NC旋盤、三次元測定機と生産設備を充実させるとともに、2004（平成16）年に敷地を拡張し組立工場を整備。火力発電所や原子力発電所などで使用される冷却水用バルブの開閉機部品の製造を手掛けた。山形県企業振興公社が主催する広域商談会に参加したのがきっかけで、発注元である日本ギア工業（株）の本社・工場（神奈川県藤沢市）に通

戦前、東京・蒲田で工場操業 船舶用油ろ過機の製造で飛躍 品質プラス製品に品性吹き込む。



（写真上）愚直なまでに技術を追求、「ものづくりのスペシャリスト集団」をめざす原田社長（前列右から3人目）と社員。（写真下）右は技術を受け継ぐ若手社員。左は油ろ過機の本体内部と製品

いながら試作を繰り返した。
「発注先の要望をしっかりと受け止め、愚直なまでに技術を追求する。信頼性の高い品質、製品に『品性』を吹き込んだものづくりを心掛けた」と原田社長。また、「主力製品の油ろ過機は川崎時代の縁。開閉機部品は日本ギア工業に山形県小国町出身の役員の方がおり、アドバイスをいただいた。こうした社の歴史、縁を大事にしたい」という。

スペシャリスト集団を目指す

その上で重要なのは「技術力の向上・継承」と「新たな仕事を求めるチャレンジ精神」。同社の従業員は52名。10代から20代、30代から40代、そして50歳以上がちょうど3分の1ずつ。3世代がうまく交わっている。リーマンショックで受注が少なかったときは、仕事を休みベテランが講師となって基本、応用、仕事への考え方をも自分自身でプリントを作成し講習会を行った。現在は半導体製造装置にかかわる仕事に取り組んでいるが、担当するのは若手だ。

「戦前から今日まで数多くの困難を乗り越えてきたが、最大の要因は『人』。少数精鋭のスペシャリスト集団として、ものづくり企業として発展していく環境を整えていくのが私の仕事です」。原田社長は力強く語った。